

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 3 日現在

機関番号：12102

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2014

課題番号：23520610

研究課題名(和文) パーソナル・テリトリーとポライトネス・ストラテジーに関する日韓中対照研究

研究課題名(英文) Comparative Study about the Personal Territory and Politeness Strategy on Japanese, Korean and Chinese

研究代表者

許 明子 (HEO, Myeongja)

筑波大学・人文社会系・准教授

研究者番号：10322611

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では日本語、韓国語、中国語を母語とする話者を対象に、コミュニケーションの場面で相手の固有の領域であるパーソナル・テリトリーについてどのように言及するかについて調査を行い、分析したものである。その結果、日韓中の3カ国の間にはパーソナル・テリトリーに言及する内容に差異が存在していることがわかった。日本人は年齢や家族について言及する割合が高い反面、中国人は言及しないことが分かった。韓国人は外見について言及する割合が高く、挨拶の代わりに言及していることが分かった。コミュニケーションの場面で誤解を防ぐためには3言語の異同について双方の理解が必要である。

研究成果の概要(英文)：In this study was conducted to investigate and analysis about how to mention the personal territory in the communication of Japanese, Korean and Chinese. As the result, between Japanese, Korean and Chinese has difference cataracts in what we refer to personal territory. Japanese higher percentage referring to the age and family, but Chinese does not mention. On the other hand, Koreans percentage referring to appearance high, was found to have mentioned instead of greeting. Mutually understand differences of Japanese, Korean and Chinese in order to prevent misunderstanding in the context of communication, it is necessary to be careful.

研究分野：日本語教育

キーワード：パーソナル・テリトリー コミュニケーション 日韓中対照研究 上下関係 親疎関係 丁寧さ 対人関係 距離感

1. 研究開始当初の背景

本研究の理論的な背景は、Brown & Levinson のポライトネス理論、鈴木睦(1998「日本語教育における丁寧体世界と普通体世界」)および益岡隆志(1992「表現の主観性と視点」)による「聞き手の私的領域」の概念、角田太作(『世界の言語と日本語』1991)による「所有傾斜」の3つの概念である。B & L 理論では FTA 行為を補償するためのストラテジーとしてポジティブ・ストラテジーとネガティブ・ストラテジーに代別し、細かく下位分類した。鈴木(1998)は日本語の「私的領域」に関連する言語内容について分析し、丁寧体の世界では聞き手のアイデンティティにかかわる言語内容、聞き手の意思決定にかかわる行動の要求、聞き手の能力に関する内容等は聞き手の私的領域に含まれるため、それに関する発話は回避すべきであると述べている。また、角田(1991)は、日本語の敬語表現の自然さには「所有傾斜」が重要な概念であり、聞き手の身体部分や属性、衣類などについて言及するときは敬語を使用する必要があると述べている。

日本語にはパーソナル・テリトリーが存在し、下の図のような段階性が存在していると考えられる(許明子 2011)。パーソナル・テリトリーの段階によって使われる言語表現には大きな違いがあるため、日本語を学習する上でパーソナル・テリトリーについて適切な認識を持つことは非常に重要である。しかし、日韓中の間にはパーソナル・テリトリーに関するずれや違いが存在し、そのずれがコミュニケーション活動の問題につながっていることが多いと思われるが、パーソナル・テリトリーに関する学習者の意識調査および談話分析はほとんど行われてこなかった。



そこで、日韓対照研究と日本語教育 話し手と聞き手との関係から見た日本語と韓国語、中国語の言語行動の対照研究の観点においてコミュニケーション・スタイルの相違点について分析を行い、日本人・韓国人・中国人が丁寧さを表すためのストラテジーにはどんな違いが存在しているかを明らかにする必要がある。

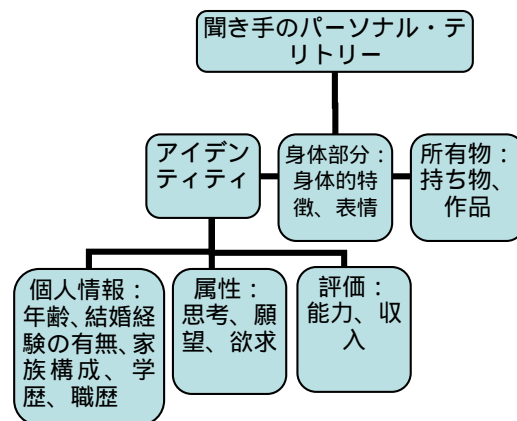
2. 研究の目的

本研究は、パーソナル・テリトリーの領域に関する認識とポライトネス・ストラテジーとの関係について日本語、韓国語、中国語の対照研究を行うものである。日本語母語話者、

韓国人日本語学習者、中国人日本語学習者の間には相手のパーソナル・テリトリーやポライトネスに関する認識が異なっており、コミュニケーション・スタイルの違いによる誤解や摩擦が生じることがある。本研究では、日韓中の聞き手のパーソナル・テリトリーの段階性について意識調査を行うとともに、発話内容・表現形式に関する談話分析・会話分析を通してポライトネス・ストラテジーについて比較対照研究を行う。本研究の成果を日本語教育現場への応用することを目指す。

日本語学習者の発話場面における大きな問題点の一つに、文法的には正しい表現であっても、丁寧さの観点からは不適切であったり、相手に不快感を与えてしまったりすることがあり、コミュニケーション活動を行う上で、困難を感じている学習者が少なくない。日本語の学習がある程度進んだ中上級レベル以上の学習者でも日本語母語話者と円滑なコミュニケーションを行うことは容易なことではない。その理由に、日本人母語話者と学習者の間のポライトネスに関する意識のずれや相手のパーソナル・テリトリーへの認識の違いがあり、そのずれや違いによってコミュニケーション活動の問題が生じていると考えられる。

そこで、本研究では日本語、韓国語、中国語のポライトネスとパーソナル・テリトリーに関する認識について、対照研究を行うことを目的とする。



日韓中のパーソナル・テリトリーに関する認識の異同およびコミュニケーション・スタイルの異同について対照分析を行い、その結果を日本語教育におけるコミュニケーション教育に応用できる方法について考察を行うことが本研究の目的である。

3. 研究の方法

本研究は、日韓中の母語話者のパーソナル・テリトリーやポライトネス・ストラテジーの関係について意識調査と談話分析の両方を通して比較分析を行った。意識調査では、自己と相手のパーソナル・テリトリーに関する認識、自己のコミュニケーション・スタイルの内省、丁寧さを表すためのストラテジー、

聞き手に対する配慮の方法などについて、自由記述形式で回答してもらった。まず、アンケート調査の概要は以下の通りである。

(1) パーソナル・テリトリーへの言及

調査対象：類似した言語環境にいる日本語母語話者と韓国人・中国人日本語学習者。筑波大学で学んでいる日本人学生 56 名(以下、J) 韓国人日本語学習者 48 名(以下、K) 中国人日本語学習者 42 名(以下、C)

調査期間：2010 年 10 月～2012 年 5 月

調査内容：対人関係・上下関係が明確な相手として「先生/同年代」、親疎関係が明確な相手として「知っている先生/初対面」を設定。発話の相手として「対先生、対同年代初対面」を設定。パーソナル・テリトリーに関わる内容について、言及するか否かについて「はい/いいえ」から選択、言及する場合はどのように表現するかについて記述してもらう。「いいえ」の場合はその理由について、母語で自由記述。選択式と自由記述式のアンケート調査

質問項目：中心部から周辺部にいたるまでの段階性が見られる 7 項目を設定

- ・対先生：年齢、結婚、家族、給料、英語能力、外見、所有物

- ・対同年代初対面：年齢、結婚、家族、英語能力、出身大学、外見、所有物

分析方法：言及の割合を日韓中で比較し、有意差があるか認められる項目について統計処理を行い、表現方法を分析。X 二乗分散分析、テキスト分析

(2) パーソナル・テリトリーに対する認識

調査対象：日本人大学生 106 名、中国の大学の大学生 109 名

調査期間：2011 年 9 月

調査内容及び方法：パーソナル・テリトリーに関わる以下の 44 項目について言及するか否か、許容できるか否かについて 5 段階のスケールの中からあてはまるものを選ぶ。

- ・アイデンティティに関わる内容

家族構成を聞く/両親のことを聞く/結婚しているかどうかを聞く/結婚相手との出会いについて聞く/親しい異性との会話の内容を聞く/子供のことを聞く/出身大学を聞く/年齢を聞く/過去の失敗経験を聞く/過去の恋愛経験を聞く/携帯電話の番号を聞く/個人のメールアドレスを聞く/趣味について聞く/収入を聞く/外国語ができるかどうか聞く

- ・身体部分

表情について感想を言う/髪型について感想を言う/服装について感想を言う/体型について感想を言う

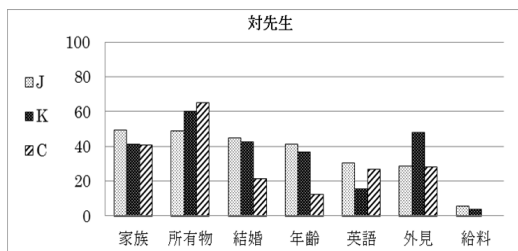
- ・所持物

携帯電話について感想を言う/携帯電話の中身を見せてくれるように頼む/パソコンの中身を見せてくれるように頼む

分析方法：カイ二乗検定、因子分析

4. 研究成果

以上の調査による分析の結果、日韓中の間にはパーソナル・テリトリーに関わる内容について言及率が高いものと言及率が低いものがあって、一定の異なる傾向があることが分かった。日韓中 3 か国の対先生、対同年代初対面の相手に対する言及率は以下のグラフで示した通りである。



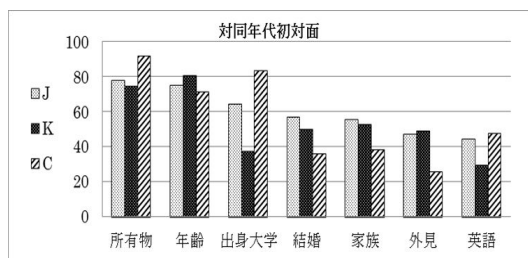
日韓中 3 か国ともに、対先生より対同年代初対面のほうが言及率が高い傾向があり、コミュニケーションを行う相手によって発話内容に違いが生じていることが分かる。3 ヶ国ともに言及率が高いのは、所有物、家族であり、3 ヶ国ともに言及率が低いのは給料である。有意差が認められた項目は、K の「外見」に関する言及が 48.1% に及んでおり、調査対象者の半分近くが言及すると回答していた。J と C はともに 28% 程度にとどまっております。K とは異なる傾向があることが分かる。

所有物の言及率は 3 カ国ともに約半分以上であるが、その他の項目は半分未満である。上下関係が明確な相手に対しては PT の言及について慎重になっていることが分かる。J の場合、「家族」「結婚」「年齢」等のような個人のプライバシーに関わる内容であっても半分から 4 割程度は言及するという回答であり、若干の違いは見られるものの K も類似した結果が得られた。しかし、C の場合は「結婚」「年齢」について J と K に比べて低く、「個人の問題だから言及しないほうがいい」という自由記述も見られ、言及を避けていることが分かった。

さらに、3 か国ともに「給料」に関する言及が最も低く、相手の能力に結び付きやすい項目は言及しにくいことが分かる。相手の能力に関わる内容なので言及しないという回答が多かったのが K の「英語能力」である。この結果は韓国の社会的な動向に起因するものであり、「聞かない」理由にも様々な意見が記されていたが、社会的な背景が発話の内容に深く関係していることが分かる。

一方、K の場合、J と C に比べて「外見」について言及するという回答が多かった。「外見」に関する日韓中の発話内容に関する自由記述を見ると、J と K は「失礼だから」「相手が気にしているかもしれないから」等の理由で言及しない人が多い反面、K の場合は「褒める内容なら」「興味があることを示したいから」等の理由で言及していることが分かった。先行研究では韓国人日本語学習者

が聞き手の主観性やアイデンティティに関わる内容の言及が多く、それがコミュニケーション活動に支障をきたしかねないという指摘がなされているが、今回の調査でもKの「外見」に関する言及がコミュニケーション活動を阻害する要因になる可能性があることが示唆された。



対同年代初対面の場合、3ヶ国ともに「所有物」「年齢」に関する言及率が高く、特に、「年齢」に関する言及は対先生に比べてかなり高くなっており、Cの場合「対先生」は12.2%であったのに対して、「対同年代」は71.4%に達している。Jに比べてKとCにとって同年代の年齢に関する情報はコミュニケーション・スタイルを決定する重要な要因の一つとして捉えていると考えられる。

3カ国の間で有意差が認められたのはKの「出身大学」の言及率で、JとKに比べてかなり低い結果であった。韓国では出身大学が個人の能力や評価に直接関係することが多く、そのような社会的な要因がPTの認識に影響しているのではないと思われる。「出身大学」について言及しない理由についても、「学歴社会では敏感な問題だから」「失礼になるから」という記述が多く見られた。「英語能力」も同様にJとCに比べて韓国人の言及率が低く、「個人の能力を聞くのは失礼」「英語ができないと恥ずかしいから」等の理由から言及を避けていることが分かった。以上のように、相手の評価に関わる内容については敬遠されており、KではPTの中心部に位置すると推測することができる。

それぞれの国の特徴を見ると、Jの場合、対先生と対同年代初対面の間で大きな差が見られ、相手によって発話内容を使い分けていることが分かる。また、Cの場合は対先生に対する言及率と同様、「結婚」「家族」「外見」に関する言及率はJとKに比べて低いことが分かった。Cは個人のアイデンティティに関連する内容については慎重に発話しているという結果が得られた。

一方、日中の大学生を対象としたパーソナル・テリトリーの言及に関する認識の調査結果は以下の5点にまとめられる。

パーソナル・テリトリーの段階性は、日中間で似ているが、ある事柄への言及を「全く問題ない」とするか「とても失礼だ」とするかを中国の方がはっきりと区別しており、段階性の緩急には違いがあった。言及が認められるか否かには日中で違い

があった。具体的には、先生に「外国語ができるかどうか聞く」「出身大学を聞く」「個人のメールアドレスを聞く」という項目は、中国人回答者の50%以上が許容的とした一方で、日本では非許容的/中間的という回答が最多となっていること

同年代で初対面の相手に、「携帯電話について感想を言う」「個人のメールアドレスを聞く」という項目は、日本が許容的なのに対して、中国の方は非許容的/中間的という回答の割合が高いこと、逆に、「出身大学を聞く」という項目は、中国に許容的な回答が多いのに対して、日本では許容的な回答が減り、中間的、非許容的な回答が増えていること

因子分析の結果から、パーソナル・テリトリーに属する事柄への言及に影響する心理構造には、日中間で違いが見られること、すなわち、同一の項目も異なる捉え方、意味づけをしていることが分かった。例えば、先生の出身大学は、中国では先生の現在のステータスを表すものとして積極的に言及されているが、日本では先生の大まかな履歴を示すものとして捉えられ、中国ほどには積極的に言及されていないこと。逆に、家族構成は、日本では家柄やステータスを表すものとして聞かれる傾向があるが、中国では原点や履歴を探ることになるため、日本ほど積極的には聞かれていない。

また、同年代で初対面の相手に「出身大学を聞く」「年齢を聞く」という項目は、日本ではその人の人となりを表すものとして捉えられているが、中国ではその人が持つネットワークを表すものとして捉えられ、日本よりも積極的に言及されていること。また、「携帯電話の番号を聞く」という項目は、日本では相手との交友や交際を始めるきっかけとして捉えられているが、中国では相手を持つ人的ネットワークへの広がりまで期待されていることがわかった。

<引用文献>

井上優(2013)『相席で黙っていられるか 日中言語行動比較論』岩波書店
 鈴木睦(1997)「日本語教育における丁寧体世界と普通体世界」『視点と主観性』くろしお版、45-74
 許明子(2009)「
 」『
 』国日語日文学会
 J&C 出版社、277-293
 許明子(2010a)「日本語と韓国語の聞き手の私的領域に関する言語行動 韓国人日本語学習者と日本語母語話者の言語行動に関する調査を通して」『地域研究』第31号、筑波大学人文社会科学部研究科、25-44
 許明子(2010b)「日韓対照研究と日本語教育 話し手と聞き手との関係から見た日本語と韓国語の言語行動について」『日本語教育研究への招待』くろしお出版、273-288

許明子(2010c)「依頼場面における前置きずれ表現に関する一考察 日本語・韓国語・中国語母語話者を対象とした調査を中心に」2010年度日本語教育学会秋季大会予稿集,213-218

益岡隆志(1997)「表現の主観性」『視点と主観性』くろしお出版,1-11

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計4件)

関崎博紀、許明子、「語用上の制約」研究の必要性 パーソナル・テリトリーへの言及に関する意識調査の結果を例に、査読有、中日民族文化比較研究、第一輯、2012、1-6

関崎博紀、許明子、日中大学のパーソナル・テリトリーへの言及可否に関する社会心理学的研究、査読有、第31回社会言語科学研究大会論文集、2012、56-59

許明子、聞き手のパーソナル・テリトリーに関わる談話分析 日本人・韓国人・中国人母語話者の調査を通して、査読有、筑波大学留学生センター日本語教育論集、第26号、筑波大学留学生センター、2011、1-17

許明子、関崎博紀、パーソナル・テリトリーに関わる日韓対照研究 表現方法の分析を通して、査読有、社会言語科学会第28回大会発表論文集 2011、28-31

[学会発表](計7件)

許明子、パーソナル・テリトリーの認識と発話内容に関する日韓中対照研究、国際日本語教育・日本研究シンポジウム、2014年11月15-16日、香港大学、香港(中国)

Myeongja, HEO、日本語母語話者と韓国人・中国人日本語学習者のパーソナル・テリトリーに関する意識と発話に関する対象研究、American Association of Teaching of Japanese、Philadelphia Marriott Downtown、2014年3月27日、フィラデルフィア(アメリカ)

許明子、パーソナル・テリトリーに関わる発話内容に関する日韓対照研究、韓国日本語学会、2013年9月27日、Hanbat大学、大田広域市(韓国)

関崎博紀、許明子、日中大学のパーソナル・テリトリーへの言及可否に関する社会心理学的研究、第30回社会言語科学研究大会、2012年9月1日、東北大学(宮城県仙台市)

許明子、パーソナル・テリトリーにかかわる発話の日韓中対照研究 日本語母語話者と韓国人・中国人日本語学習者との比較を通して、日本語教育国際研究大会、2012年8月18日、名古屋大学東山キャンパス(愛知県名古屋市)

許明子、関崎博紀、パーソナル・テリトリ

ーの認識に関する日韓中対照研究、社会言語科学会、第28回大会発表、2011年9月17日、龍谷大学深草キャンパス(京都府京都市)

許明子、関崎博紀、丁寧さと発話内容に関する日韓中対照研究 パーソナル・テリトリーの段階性を中心に、日本語教育世界大会、2011年8月21日、中国天津外国語大学、天津(中国)

[図書](計4件)

許明子、「パーソナル・テリトリーの認識と発話内容に関する日韓中対照研究」『国際日本語教育・日本研究シンポジウム論文集』、2015年(印刷中)

許明子、『パーソナル・テリトリーとポライトネス・ストラテジーに関する日韓中対照研究』、科研費成果報告書、筑波印刷、83頁、2015年

許明子、「コミュニケーション能力を向上させるための日本語の文法教育」『日本語教育最前線』、韓国日本語学会編、図書出版チェックサラン、353-366、2013年

許明子、「依頼場面における日韓両言語の談話構成について 日本語母語話者と韓国人日本語学習者の比較を通して」『日本語・日本語教育の研究 その今、その歴史』加藤好崇・新内康子・平高史也・関正昭：編著、92-104、2013年、スリーエーネットワーク

6. 研究組織

(1) 研究代表者

許明子(HEO, Myeongja)
筑波大学・人文社会系・准教授
研究者番号：10322611

(2) 研究分担者

関崎博紀(SEKIZAKI, Hironori)
筑波大学・人文社会系・助教
研究者番号：30512850

(3) 研究協力者

金東圭(KIM, Dongkyu)
韓国外国語大学日本語学科・教授

姚艶玲(YAO, Yanling)
中国大連外国語大学日本語学科・教授